

「戦国大名と鉱物資源 —硫黄大名 vs.銀大名—

鹿毛敏夫 (名古屋学院大学国際文化学部教授)

はじめに — 通説をくつがえす史料 —

★薩摩の阿久根の港で破損したカンボジア帰りの大友船に関する注目すべき史料

[史料 1] (『鹿児島県史料』旧記雑録後編 1、692)

就破艘之儀、毎々御使書珍重令存候、如御札貴家当方以御堅盟之故、自他之覚彼是法意之扱露頭之上、纔被廻思慮、船・銀子・鹿皮、南蛮国進物種々、以目錄被進候事歴然候、其外巨細之段、到寿庵齋申談候条、難盡紙面、先々閣筆候、余者仲掃部助殿可有演説候、恐々、

元四 九月 日

豊州老中へ返書案文

(伊集院) 忠金

(平田) 昌宗

(河上) 意鈞

元龜 4=天正元 (1573) 年 9 月に島津氏奉行人が大友氏に宛てた返書案文

「大友船の破艘について、大友・島津両家は盟約関係にあるので、船と積み荷については目録に書き上げられている通りに進上するつもりである」

返書案文中の「船・銀子・鹿皮、南蛮国進物種々」(…部分)の文言

→島津氏が抑留したカンボジア帰りの大友「船」の主要な積み荷は、「銀子」と「鹿皮」だった

「南蛮国進物種々」…カンボジア国王から大友義鎮への贈答品

「鹿皮」…17世紀初頭の朱印船貿易で、東南アジア諸国から大量に輸入された商品

「銀子」…16世紀後半期アジアの銀流通については、これまで石見銀山を中心とした日本銀の輸出ばかりに目がいきがち。だが、カンボジア帰りの大友船は、明らかに東南アジアから銀を輸入 →16世紀後半東アジアの経済システムを論じるにおいて、日本を銀の一方的な輸出国として見る固定観念を捨て、銀の双方向流通という複眼的視点を持つべき

◎なぜ、大友氏はカンボジアから銀を輸入したのか？

[1]室町・戦国期日本の「硫黄」産業

15~16世紀日本の硫黄…中国明朝を相手とした遣明船派遣の積み荷として顕著に検出される

(例) 宝徳 3 (1451) 年の遣明船団 (総勢 9 艘の船、1,200 人の使節団員)

日本→寧波に入港→北京で皇帝拝謁

表 宝徳度遣明船団の主要積み荷の品目と量 (『大乘院日記目録』享徳 2 年 12 月 27 日条)

品目	輸出量 (1 斤=600 匁)
太刀	9 5 0 0 振
長刀	4 1 7 振
扇	1 2 5 0 本
銅	1 5 万 4 5 0 0 斤 (92.7 トン)
硫黄	3 9 万 7 5 0 0 斤 (238.5 トン)

→15世紀の日中間を往来する遣明船貿易の最大の輸出品は「硫黄」

= 「サルファーラッシュ」の遣明船

◎室町幕府は、大量の硫黄をどこから調達したのか？

(例) 寛正 6 (1465) 年の遣明船派遣

「一、硫黄四万斤、大友方・志摩津方進之、於門司・博多両所請取之、此内一万斤進上、三万斤商買方」(『戊子入明記』)

→派遣船に積み込む 4 万斤の硫黄は、門司と博多で九州の二大守護大名大友氏と島津氏から受領九州の硫黄産地

・薩摩の硫黄島…大隅半島の佐多岬から南西 50 キロ、標高 703 メートルの硫黄岳

・豊後の硫黄山…①くじゅう連山の硫黄山（標高 1,550 メートル）

②塚原の伽藍岳（標高 1,415 メートル）

→守護大名期大友氏…8代氏時～10代親世の14世紀後半に硫黄産地と鉱石搬出ルートを通じた

●中世の日宋・日明貿易のみならず、近世初頭の朱印船貿易においても日本から多くの硫黄鉱石が東南アジア方面に運ばれていた

[2] 肥後相良氏の銀山発見

[史料2] (「相良家文書」417 (『大日本古文書』家わけ5-1))

寔吉兆、千喜万祥、珍重々々、仍銀石之事、大工洞雲へ見せさせられ候、但州石にも勝候之由申候歟、満足此事候、如此之儀、日本珍物候之处、至当代現来之儀、不相応之事候之条、倍可為校量候、諸篇御 神慮無疑候之間、家繁栄心懸無申及候、去年官務殿為 勅使被成御下候、過分之至、外聞実不可過之候之处、右之趣、希代不思儀之奇特、更不及言説候、彼大工可急之由申候歟、得其心候之条、直申越候、旁以別紙申候、可入其思慮候、天文十五年丙午七月六日於宮原銀石現出之旨、記録之儀、不可有油断候、彼一通之事、為後日之条、然々被納置候て肝要候、猶期後喜候、恐々謹言、

七月十二日

(礼紙) 「 (相良晴広) 右兵衛佐殿

義滋 (花押)

義滋 」

天文15 (1546) 年7月12日付の相良晴広宛て相良義滋書状

→同年7月6日に相良氏領肥後の宮原の山中から、但馬生野銀以上に良質な銀鉱脈が見つかったことを、義滋が「吉兆、千喜万祥」「満足此事候」と大喜び

◎中国地方で石見銀山や但馬生野銀山の開発が進み、その鉱物資源をもとに大内氏や山名氏が経済力を拡大しつつあるとの情報は、相良氏のもとにも伝わっていたはず

→宮原 (熊本県球磨郡あさぎり町) から「但州石にも勝候」銀鉱脈が見つかったとの情報は、九州地方の諸大名間の覇権争いを優位に進めたい相良義滋を歓喜させ、その「銀石現出」を「御神慮」と位置づけて、「家繁栄心懸」に励むよう晴広に伝えた

そして、天文23 (1554) 年2月、相良晴広は大名船「市木丸」を建造 (『八代日記』)

→銀を財源および商品とした遣明船を度々中国に派遣

●遣明船を派遣して明との交易を実現するには、その資本となる銀を潤沢に保有する必要性あり

→相良氏…天文15年にその原資となる銀を獲得、天文20年代に度々の遣明船派遣

[3] 硫黄 (サルファー) から銀 (シルバー) への時代転換

①15世紀～16世紀半ばの室町期日本の中心的産業鉱物資源および主要輸出資源は「硫黄」

室町幕府…中国へ輸出する硫黄の調達を、火山が多くかつ遣明船航路に位置する九州の守護大名島津氏と大友氏に求めた

島津氏と大友氏…幕府の調達命令を梃子に、領国 (薩摩と豊後) 内の硫黄鉱石産地と搬出ルートを支配下に収め、また、その領国内には硫黄鉱山を中心とした硫黄産業が発達

●15～16世紀の島津氏と大友氏の戦国大名への成長とその富強化→経済的側面においては、自領国内に保有する良質な硫黄鉱山からの鉱物資源の恩恵に負う部分大きい

島津氏と大友氏=豊富な硫黄資源で室町・戦国期他大名に優越した「硫黄大名 (サルファー大名)」

②16世紀半ばの戦国末期になると、新たな鉱物資源としての「銀」鉱山の開発が進展

→精錬技術の進歩により銀が主要輸出資源となり、16世紀半ば～17世紀の中心的鉱物資源に銀鉱山からの恩恵を受けたのが、石見銀山や但馬生野銀山等の良質銀鉱山への権益を競合の上で獲得した大内氏・山名氏・尼子氏・毛利氏 (相良氏も肥後宮原銀山の発見によって追従)

(領国内に火山を有さないため、「サルファーマネー」の恩恵を得ることができなかった大名たち)

→16世紀末には、国内統一を成し遂げた豊臣政権が各地の主要銀山をおさえて、利益を独占

●16世紀半ば以降の毛利氏や豊臣氏ら

=新たな鉱物資源の銀を支配することで他大名に優越した「銀大名 (シルバー大名)」

☆鉱物資源の獲得競争という観点から見ると、15～17世紀の日本社会は、

硫黄を征す「サルファーマネー」の時代から、銀を征す「シルバーマネー」の時代に大きく転換
☆中心的鉱物資源の時代転換（銀流通の拡大と貨幣化という新たな時代潮流）のなか、島津氏と大友氏は不利な状況に（島津・大友領国は、硫黄鉱山のメッカであったが、良質な銀鉱山に恵まれず）

銀鉱山の発見を「寔吉兆、千喜万祥」「家繁栄心懸」と異常なまでに歓喜した相良義滋
→銀資源獲得競争のなか、有効な銀山を有さない大友義鎮（宗麟）がとった手段

●1570年代に締結したカンボジア国王との外交関係を利用して、東南アジアから銀を輸入する政策
豪商仲屋氏を商人司として天正元（1573）年に大友氏がカンボジアに派遣した交易船

→豊後産硫黄を主要な積み荷としてカンボジアに輸出

帰路では、豊後で不足していた銀と鹿皮およびカンボジア国王からの贈答品を持ち帰った

「15世紀から17世紀にかけての列島社会は、「硫黄の世紀」から「銀の世紀」へと大きく時代相が転換していく流れを有しており、室町・戦国から近世初頭までの武家社会日本は、硫黄山を領有する「硫黄大名」が経済的に優越した時代から、銀山権益を獲得した「銀大名」が優越する時代へと転化していった。島津氏、大友氏から毛利氏、豊臣氏までの諸大名が各鉱物資源の獲得に競合する数百年間の時代を経て、やがて17世紀初頭に成立した徳川政権は、硫黄と銀の両方の権益を全国的に獲得して、安定した統一政権を実現した。初期の江戸幕府は、「硫黄の世紀」から「銀の世紀」への転換を集約し、サルファーマネーとシルバーマネーの双方を優越的に獲得した徳川氏の鉱業政策によって経済的に支えられたものとも言えよう。そして、その後の近代の歴史は、全国で炭鉱開発に伴う産業が隆盛を極めた「石炭の世紀」を経て、20世紀の「石油の世紀」＝オイルマネーの時代へと推移していく」（鹿毛敏夫編『硫黄と銀の室町・戦国』〈思文閣出版、2021年3月新刊〉244頁）

【4】 鉱物資源の競合・獲得・利活用の歴史

従来の常識・銀鉱山は金や銅の鉱山と比較するもの

→◎なぜ、硫黄と銀を比較するのか？

・硫黄（元素記号S）と銀（同Ag）は、物理学的には全く異なる性質の鉱物であるが、前近代社会においては、鉱山における採掘から、「山子」ら人夫による運搬、不純物を取り除く精錬、問屋を介した販売・輸送にいたる基本的工程は同一

・「サルファーマネー」「シルバーマネー」と称されるその大量生産は、当該日本社会に新たなビジネスを発生させた

（例）硫黄と銀の産地で16～17世紀に活動する「計屋（はかりや）」（硫黄や銀の計量商人）

→問屋商人的性質を帯びる流通機構上の特性から、遠隔地商人を統括する商人司や中心都市の豪商へと成長、一部は大名権力と結び付く政商的地位まで身分上昇

・特にアジアおよび世界の貿易や貨幣経済と結び付くことになる硫黄と銀

→産地から消費地へとつながる社会構造を広域的に分析することで、中・近世日本の産業構造が東アジア全体の貿易構造にどう関わっていたかを明らかにし、その日本史研究の成果を学際的かつ国際的なステージに遡上させることも可能となる

硫黄と銀…人間社会がその発展のために依拠した地球上の鉱物資源という視点から見ると、歴史的に極めて類似・共通性の高い物質

→両鉱物は、古代からの採掘の歴史を有し、特に、日本の室町・戦国期から近世初頭にかけての時期には、アジアからヨーロッパまでつながるグローバル経済の波に乗って輸出入され、時の政治権力（室町幕府、守護大名、戦国大名、豊臣政権、江戸幕府）を支える重要な経済基盤になった

★古代から現代に至る人類の歴史＝地球上の鉱物資源の競合・獲得・利活用の歴史

→金・銀・銅の採掘はもとより、硫黄、石炭、石油といった様々な鉱物資源の確保・活用によって産業が発達し、人々の暮らしが豊かになってきたとともに、それらの採掘権の競合や独占という事態をめぐって人が対立し、国家間の紛争が生じてきた

その論点の一つ＝地球上の陸上域における「鉱物資源の偏在」の問題

銀…「新大陸」や日本での大量の埋蔵と生産の情報が伝わると、それらは瞬く間にスペインやポ

- ルトガルの国家政策と結び付き、国際通貨と化して、中国をはじめ世界各地に流通
 硫黄…世界経済が一体化される以前の地域的国際社会のなかで、重要な軍需品としての性格を伴
 って、鉛や硝石等とともに輸出入が繰り返された
- 世界史における「資源の偏在」を要因とする歴史掌握の考え方
- 列島各地で群雄が割拠した室町・戦国期日本社会の分析においても有効な論理となろう【仮説】
 - ・硫黄をふんだんに産出する「九州地方」に室町期とその前後を一貫する長期的大名権力が成長・持続
 - ・戦国末期の銀の時代になると、その有力産地を有する「中国地方」の大名権力がそれらを凌駕
 - ・「四国地方」では、硫黄も良質な銀産地もないため、経済的に潤った大規模かつ長期政権的な大名が育ちにくかった
 - ・東海・中部以東から東北・北海道にかけての「東日本」
 - 硫黄はふんだんにあるものの、その輸出貿易を行う国際的環境が室町期までは未組織（地政学的制約）
 - 戦国期に金鉱山開発が進んで大名権力の重要財源となるものの、鉱物そのものが有する稀少性のため、銀のような国際的に流通する貨幣にはならず
- 決して単一・均質ではない日本列島の政治・経済的力学の動向を、「鉱物資源の偏在」とそれを要因とした人間による競合・奪取・独占の歴史として分析した時、世界史ないしは人類史と有機的につながる共時性を見つけ、周辺アジア諸国の歴史や世界全体の歴史文脈と共鳴できる日本史像をイメージできる

おわりに — 本日のミニレクチャーへの導入 —

第1ラウンド「硫黄と銀の国際環境」 山内晋次氏 vs. 岡美穂子氏

- ・山内氏…10世紀末～16世紀の日本列島産硫黄の国際的な流通状況を通史的に考察
- ・岡氏…「銀の島」として知られた16世紀日本をめぐるポルトガル人とスペイン人のせめぎ合い
- ★アジア的・世界的規模で幅広く流通した硫黄と銀
 - 硫黄…火薬原料として軍需面で大量利用
 - 銀…貨幣としてグローバル化した社会の世界通貨の役割

第2ラウンド「硫黄山・銀山の考古学」 遠藤浩巳氏 vs. 續伸一郎氏

- ・遠藤氏…2007年に世界遺産登録された石見銀山遺跡の調査・研究・保存・整備の取り組み
- ・續氏…堺環濠都市遺跡出土のタイ・メナムノイ窯四耳壺2個（16世紀後半、精錬前の硫黄を充填）
同位体比解析→硫黄は豊後の伽藍岳・くじゅう硫黄山とほぼ同一成分、そのからくりは？
- ★両鉱物資源をめぐる考古学研究進展の大きな差異がクローズアップされる
 - ・銀山跡…鉱脈に沿う坑道（間歩）の痕跡を遺跡として残しやすい
 - ・硫黄山跡…火山生成した鉱石を表面採掘→遺構が形ある産業遺産としては極めて残りにくい

第3ラウンド「サルファーラッシュ・シルバーラッシュの産地と社会構造」伊藤幸司氏 vs. 仲野義文氏

- ・伊藤氏…中世における輸出硫黄の最大産地九州における港町・船・運搬航路のネットワーク
- ・仲野氏…石見銀の産地における銀生産の実態と毛利氏から徳川氏への支配システムの変化
- ★公権力の鉱山支配のあり方の相違と、それに基づく産業構造の違い

- すでに20世紀来の「石油の世紀」を謳歌してきた私たちに、その前世紀の「石炭」からの恩恵の記憶が薄れたように、「石炭の世紀」の産業革命に邁進した人々も、その前世紀の「銀」が有した世界通貨の意義を喪失。同様に、16世紀後半以降の「銀の世紀」に世界経済の一体化を担った人々も、その直前の火器（鉄砲等）の時代に広く流通した「硫黄」や「鉛」の軍需品としての価値を忘却
- 「硫黄の世紀」→「銀の世紀」→「石炭の世紀」→「石油の世紀」
 鉱物資源に依存してきた人類の歴史の大きな流れの理解→限りあるそれらの資源を今後どう利活用して未来の社会を構築していくかという道標を立てることも可能となろう